ことぶき「なか」だより
No.172
2015.12.

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　石倉夕子　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

寿地区センターの歩みと寿のいま

炊き出しの野菜の切り込み作業

日本基督教団神奈川教区寿地区センター　主事　三森　妃佐子　さん

なか伝道所のメンバーであり、寿地区センターの立ち上げ時より関わってきた三森妃佐子さんから、同センターの三〇年間の歩みと寿の現状について学んだ。学習会は、三森さん、沓澤則子さん（訪問看護ステーションコスモスの看護師・伝道所メンバー）の案内でフィールドワークを行った後、三森さんからお話をうかがうというスタイルで進められた。

寿地区センターの成立

一九七〇年前後、日本基督教団を取り巻くさまざまな出来事を通じて、宣教の理解の在り方について厳しい問い直しが迫られました。そうした背景のもと、一九八〇年代に神奈川教区社会委員会が新しい宣教プロジェクトを立ち上げようとした際、寿の問題に個人的に関わろうとしていた牧師や信徒の活動がクローズアップされてきました。

一九八三年、野々村耀牧師（当時平塚中原教会）が、神奈川教区からことぶき福祉作業所に派遣され、寿での活動を開始しました。野々村牧師の「作業所のみんなで一緒に昼食をとりたい」という呼びかけに応え、横浜磯子教会や紅葉坂教会などいくつかの教会がこの昼食会に賛同しました。今でも続けられています。

一九八六年、野々村牧師が寿を去るとき、次のような言葉を残しました。ひとつは、寿での活動には拠点が必要であるということ。もうひとつは、ひとりではなく仲間との活動が重要であるということです。

当時神学校時代、浅草北部教会に通い、山谷の活動を手伝っていたこともあり声をかけていただきました。やがて、野々村牧師が言った拠点が必要とのことで探したところ、金岡ビルの一室が空いていました。そこに寿地区センターを開設しました。

ただし、寿での活動継続については、神奈川教区でも、諸手を挙げて賛成する人ばかりではなくて、反対する人もいました。けれども教区の働きとして祈り支えられておりますことを感謝致します。ただし、寿地区センターは教区のなかで予算化されている活動ではありません。バザーなどで収入の一部を賄っていますが、残りの活動資金はすべて献金に頼っています。

最初期の寿地区センター

「寿の人たちが本当に必要としていることをしてほしい」、「キリスト教関係の人は、来るのも早いがすぐに去って行ってしまう」。活動の初期に投げかけられたこの二つの言葉を胸に、寿での活動を三〇年間にわたって続けてきたように思います。

私が寿に来た当初、すでに学童保育、老人クラブ、アルコール依存症への対策会などが組織され、身体障がい者の作業所も存在していました。けれども、精神障がい者の居場所がないことを教えられました。手探りのなか、まず精神障がい者に関する勉強会から活動を始めました。そして、とにかくやってみようということで、精神障がい者の人三、四人に金岡ビル三〇三号室まで来てもらって、週に三回、楽しんでゆっくりしてもらうスペース作りをしました。これが「ろばの家」の始まりです。「ろばの家」はその後、市民の会「ろばの会」により運営されていきます。徐々に地域の人たちとの関係ができはじめ、炊き出しやパトロールなどの活動に結びついていきました。

この頃、「ろばの家」に通って来ていた

四〇代男性のエピソードが忘れられません。彼は、「自分はここで生まれて初めて誕生会を開いてもらった」と言って、とても喜んでくれました。私はそのとき、この人の生そのものが、あたたかく祝い、喜んでもらえることがなかったのだと感じ、教えられたときでした。

寿地区センターの活動

寿地区センターの活動は※表1にまとめた通りです。ここでは、センター独自の活動として「寿わーく」を中心にお話しましょう。

寿わーくは青年たちに呼びかけて、寿でフィールドワークをしてもらう、年に三回のプログラムです。

寿の問題は日本の抱える問題の縮図です。ひとつの言葉で表現すれば、それは差別。寿町に住んでいるというだけで、その人がどのような人かは関係なく差別される。私個人としても、寿に居ながら、その差別をどうやってなくすよう闘っていけるのかを考えています。そして、寿の内と外との接点で、外から来てもらった人に、寿の実態を見てもらおうという気持ちからスタートしたのが寿わーくです。

実は、青年たちのフィールドワークに対しては、「寿の人はかわいそう、かわいそうな人たちのために何かしてあげたい」という考えをただ植えつけるだけではないか、という批判もあります。でも、私自身はとにかく寿の生の姿を見てもらい、そこで学んで自分たちが何をできるか、どうやって社会を変えていけるか、ということについて一緒に考えていきたい。そうしたなかで、本当に自分は小さい存在だけれども、みんなと活動することで、社会を変えていけるんだ、という実感を持ってほしいと願っています。そして、私が感じている寿ではなく、関わった一人ひとりが、さまざまな人との交流を通じて自分なりの寿像を描き、それを周囲の人に伝えていってくれることを望んでいます。

寿わーくの様子

教会の可能性

教会は各地域に建てられています。だから、各地域の課題を担ってこそ、教会の意義があるのではないかと思っています。たとえば、戸塚、藤沢、相模原、小田原などの教会では、地域のなかで野宿者が増えてきたという問題意識から、寿に来て、ここで感じたことを覚えて考えながら、各教会に戻り、それぞれの野宿者支援の活動につなげていきました。

教会に野宿の人が相談に来るということは、教会に行けば何か助けてくれるのではないかという希望があるから。そのときに、すぐにお金を出すのではなく、丁寧にその人の声に耳を傾け、その人がいま何を必要としているかを考えることがいちばん大事だと思います。

寿地区センターの歩みを通して

三〇年間活動を続けてきて、あぁ何かやっているな、何か知らないけど町にいるな、と寿のみなさんに受け入れてもらえるようになったのではないかと感じています。

私は寿地区センターという場で、みんなと話し合いながら、ひとつずつの活動を続けてきました。それは本当に豊かなものでした。これから寿が以前のような活気のある場所になるかというと、そうは思いません。寿に住んでいる一人ひとりの人たちが、生きやすく楽しい時間を過ごせるように、そして自分の人生を振り返っていい人生だったなぁと思えるようなところにしていきたい。今後も寿にこざるを得なかった人たちに寄り添いどう支えていくかが課題になってくると考えています。

寿地区センター　公式ウェブサイトより

※表1 寿地区センターの主な活動

- 寿わーくの企画・運営
- 講演会の開催
- バザーの開催
- ボランティア会の開催
- 炊き出しへの参加・協力（毎週金曜日）
- 越冬活動への参加
- 野宿者訪問への参加・協力
- 地域の高齢者への支援
- 地域での取り組み・市民ボランティア団体への支援・協力
- 地域で暮らす障がい者への支援

（まとめ　幸前元）

クリスマス献金のお願い

今年もまたクリスマスを迎えます。毎週語り合える礼拝の席にはイエス様が共にいて、神の言葉に心を開かせてくれます。誰にでも開かれた礼拝であることを常に忘れないように・・・。昨今の経済状況などから本当に心苦しいのですが、今年もクリスマス献金をお願いします。昨年は、四二二、九〇〇円のご支援をいただきました。みなさまのご支援、ご協力感謝します。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

使信

「ヨセフの決心」

石倉夕子

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。

母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

（マタイによる福音書　一章一八節～二五節）

クリスマスによく語られるのはどちらかと言うとイエスの母マリアです。しかし今回はこの人がいなかったらイエスは生まれてこなかっただろうという人物のお話です。

その名は「ヨセフ」。皆さんよくご存知の人物です。クリスマスのお話は、イエスの死後に教会が設立し、その教会の中で生まれてきたお話です。そしてマタイによる福音書とルカによる福音書だけにあって、それよりも前に書かれたマルコによる福音書やパウロの手紙などには書いてありません。そして今日のテキストの「ヨセフ伝承」と言うべきこの記事はマタイだけの記事です。イエスの父のヨセフとはどういう人物だったのでしょうか？

一八節後半、とても信じられない言葉で始まります。婚約者マリアが身ごもったのです。それも二人が一緒になる前にです。「聖霊によって」という言葉がなければとてもスキャンダラスな出来事です。申命記には婚約中のおとめが他の男性と性的関係を持った場合、両人共に石打による死刑に処せられるとあります。（申命記二二章二三節～二四節）仮にそれがレイプによるもの（あくまでも女性が助けを求めた場合）だとしたら男性のみが処刑され、女性には何も罪はないと同じ箇所で定められています。仮にレイプによる妊娠だとしても、女性には罪がないとしても婚約者の男性にとってはどうでしょうか？一般的には屈辱であり感情的には受け入れられないものだと思います。男性の方たちはもし自分の身に同じようなことが起こったらと想像してみてください。仮にヨセフが握りつぶしたとしても、他の親族は、またナザレの町の人々はそのことを知っている。

イエスの出生に対してあまりよく思っていなかった町の人々の話は、マルコによる福音書九章三節にあります。人々はイエスのことを「マリアの息子」と呼びます。この部分はよくイエスの父親のヨセフはすでに死んでしまっていたので、「マリアの子」と呼ばれたという解釈があります。しかしユダヤではあくまでも「ヨセフの息子」というように父親の名が出てこなければならないのです。母親の名を使って息子（マリアの子イエス）と呼ばれる場合はその子が「非嫡出子」であると言うことです。イエスの誕生物語を知らないマルコによる福音書にイエスの出生が尋常でないかもしれないと読める記事があるのはとても興味深いことです。このことも含め今日のヨセフの伝承を読むとヨセフの人物像が浮かび上がってきます。

えーとねえ

璃世「あーうー」
美宇「なに？お姉ちゃんよ」
璃世「あーうー」
美宇「ママ、璃世ちゃんがなにか食べたいって言ってる」
ママ「本当に？」
美宇「うん」

妹の言葉を解釈する姉。　郭美宇　四歳

一九節に「夫ヨセフは正しい人だったので・・・」とあります。「正しい」とは何を意味するのでしょうか。聖書で通常「正しい人」と言えば律法に忠実な人と思われがちです。許嫁のマリアに対する処分を悟り悩んだ末に「マリアのことを表沙汰にするのを望まず、密かに縁を切ろうと決心した」のも、律法に忠実であり、律法を熟知していた「正しい人」であればうなずける結論です。しかしここは単に「律法に忠実」な「正しい人」なのでしょうか？

この後二〇節に処女壊胎物語が狭まります。特にマタイは「ダビデの子ヨセフ」とすることでイエスも「ダビデの子イエス」となるように創作しています。この処女壊胎物語を除くと二四節の「妻を迎い入れ、そして、その子イエスと名付けた」が「正しい人」ヨセフの正しさなのです。二〇節に「このように考えていると」口語訳では「思い巡らしていると」ですが、この「考えている」や「思い巡らす」という言葉はギリシャ語で「エンスメオマイ」という言葉です。この言葉にはもう一つ意味があり「腹を立てる」という意味もあるそうです。ある日突然自分の許嫁が妊娠していると聞かされたヨセフが、落ち着いて「考える」事などできるのか・・・。むしろ深い失望を味わって、憤り（腹を立てる）を感じるのが自然だと思います。心理学で人は突然、そしてとても理不尽な出来事に遭遇するとまず悲しみ、その悲しみが怒りに変わり、最終的に受容していくと言われています。（悲しみと怒りは人によって逆の場合があります）

ヨセフはまさにこのことを体験した人だったのではないでしょうか。ヨセフの正しさとは神の前で「律法」を超え、苦しみのただ中にいたマリアの側に立ったことだと思います。それはヨセフが生涯暮らした時代の文化に抵抗する事だったのです。

イエスの誕生を巡るこのヨセフの苦しみの出来事は、教会によって飾り付けられた美しい物語の中で「聖家族の父親」として変質していったのだと思います。

当時の社会の文化に抵抗し、マリアとイエスを認知しその命を守り、共に生きることを選んだ「正しい人」ヨセフ。クリスマスを前にこのヨセフの決断を今一度覚えることは、とても重要なことではないでしょうか。

まど

（短歌）　安保ふたたび　渡辺　英俊

砂粒の一つといへどゼロならず国会に向かふデモにわがをり
「九条壊すな」プラカードを掲げ人溢る国会議事堂前小雨の鋪道
強行裁決迫るを国会の庭に聞く戦後七十年平和の畢り
首相汝が祖父の安保に声挙げて五十五年前も我ここにありき
祖父は「安保」孫は「集団的自衛権」一族が国の行く末を曲ぐ
己が身に戦禍招くを思ひしや漫然投票垂れ来し民ら
九条の非戦の決意確かなり交戦権はこれを認めず
人道の名に羞ぢざるや交戦権なき兵隊を戦線に送る
正当防衛に縛られて身を守れるや近代戦は先手必勝
撃たれねば撃てぬといふ法の縛りあり自衛隊員よ死にに征くなよ
安んじて安保法制を押し通す己れは戦に征かぬ輩が
軍需利権法案の裏に仄見えて裁決強行の謎解き明かす
メディア挙り兵隊志願を美談とぞ褒めそやす代の再び来らむ
教科書が子らを戦に駆り立てる文科省検定の墨を塗られて
武器を執る者は武器にて滅ぶなり「国を守る」が国を滅ぼす

編集後記

普段会ってお話する三森さんは、穏やかでやさしい。でも、今回編集作業に携わり文字におこしてみて、その言葉の強さに驚いた。考えてみれば当然のことで、体を張って差別と闘っている人の言葉が、フニャフニャであるわけがない。私ももうすぐ四〇歳。地に足が着いた言葉を使えているだろうか……。（元）